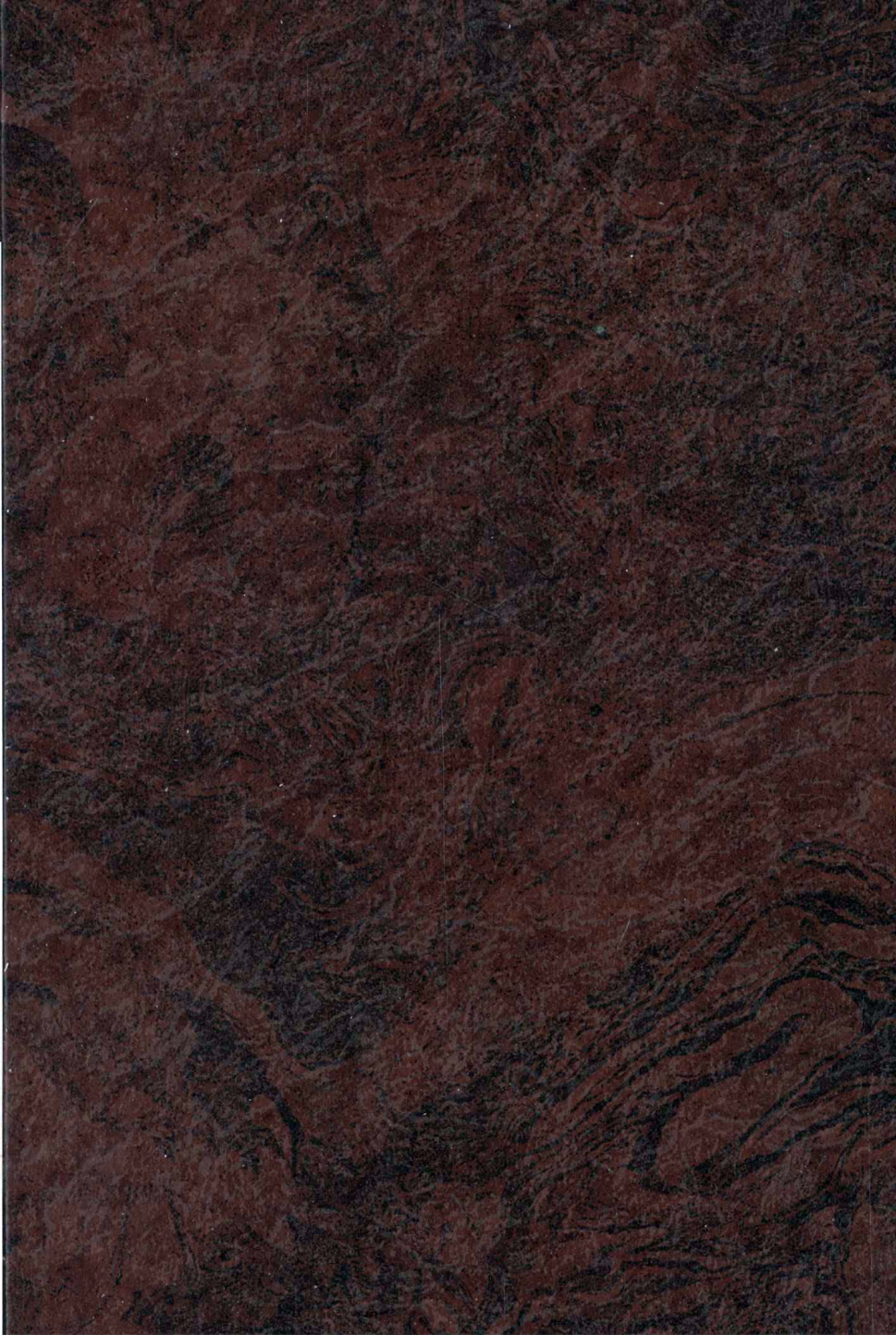




昭和の探偵小説

昭和元年～昭和二十年

伊藤秀雄



伊藤秀雄（いとう・ひでお）

一九二五年川崎市生まれ、四九年日本大学国文科卒業。

川崎市役所勤務をへて、現在、明治文学研究家、随筆家、日本推理作家協会会員、大衆文学研究会会員、日本大学講師。

著書『黒岩涙香伝』（国文社）、『黒岩涙香研究』（幻影城）、『改訂増補黒岩涙香その小説のすべて』（桃源社）、『明治の探偵小説』（晶文社、第四十回日本推理作家協会賞評論部門受賞）、『黒岩涙香―探偵小説の元祖』（三一書房、第三回大衆文学研究賞研究・考証部門受賞）、『大正の探偵小説』（三一書房）ほか
住所 〒213神奈川県川崎市高津区千年新町

25-3

昭和の探偵小説

一九九三年二月十五日 第一版第一刷発行

著者 伊藤秀雄 © 一九九三年

発行者 畠山 滋

発行所 株式会社 三一書房

東京都文京区本郷二―一―三

電話〇三（三八二）三一二一―五番

振替東京九一八四一六〇番

株式会社厚德社

印刷所
製本所

東京美術紙工

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

ISBN4-380-93203-6

昭和の探偵小説

目次

序章

昭和以前

9

一 涙香の出現

10

二 探偵実話時代

13

三 創作家・翻訳者の輩出

16

四 押川春浪らの登場

19

五 「ジゴマ」映画の輸入

20

六 新進・小原柳巷らの登場

21

七 「新青年」の創刊

23

第一部

昭和第一期（勃興期

大正末〜昭和八年）

25

第一章

江戸川乱歩らの活躍

26

一 江戸川乱歩

27

二 甲賀三郎

45

三 大下宇陀児

56

四 小酒井不木

66

第二章

ヴァン・ダインの登場と新進の活躍

77

一 浜尾四郎

78

二 水谷準

87

三	夢野久作	91
四	渡辺 温	96
五	渡辺 啓助	101
六	葛山二郎	104
七	海野十三	108
八	瀬下 耽	112
九	稲垣足穂	114
十	水上呂理	116
十一	橋本五郎	118
第三章	少年探偵小説の勃興	121
一	昭和以前	121
二	昭和期と「少年倶楽部」	129
三	高垣 眸	132
四	吉川英治	140
五	大佛次郎	144
六	野村胡堂	150
七	江戸川乱歩	155
第四章	探偵小説全集と「蠢く触手」	160
一	探偵小説全集の出版	160

二 「蠢く触手」について 162

三 昭和十年以後の探偵小説全集 167

第五章 「日本探偵叢書」その他 169

一 「日本探偵叢書」 169

二 「現代探偵名著叢書」 177

三 「黒岩涙香先生訳（大改訂版）」 185

四 「黒岩涙香訳」 187

第二部 昭和第二期（隆盛期 八〜十三年）

189

第六章 既成作家の結実 190

一 勃興の機運 190

二 江戸川乱歩 192

三 甲賀三郎 207

四 大下宇陀児^{うだも} 213

五 横溝正史 219

六 水谷 準 228

七 夢野久作 231

八 渡辺啓助 247

九 海野十三 251

十 大阪圭吉

258

第七章 犯人探し・宝探し懸賞小説の流行

261

一 謎解きゲーム小説の起源

261

二 その流行

263

第八章 新進作家の輩出

281

一 小栗虫太郎

282

二 木々高太郎

289

三 久生十蘭

296

四 蒼井雄

301

五 蘭 郁二郎

308

第九章 諸家の探偵小説論

310

一 浜尾四郎の「探偵小説を中心として」

310

二 海野十三の「探偵小説管見」

313

三 甲賀三郎の「探偵小説講話——まえ書」

315

四 木々高太郎の探偵小説論

319

第三部 昭和第三期（屏息期 十四～二十年）

323

第十章 戦時下の探偵小説

324

一 野村胡堂の「銭形平次捕物控」

326

二 スパイ関係実話・小説 328

終章 戦後の動向 335

主要参考文献 339

あとがき 341

昭和探偵小説略年表 343

索引

装幀・毛利一枝

昭和の探偵小説

昭和元年～二十年

序章

昭和以前

一 涙香の出現

探偵趣味の読物が大衆の興味の対象となったのは、江戸時代からと考えられる。当時、「大岡政談」をはじめとする裁判物、お家騒動、復讐物、怪談などの類が夥しく刊行されていた。

徳川幕府が滅び明治政府が樹立されて間もない明治初期には、文学や芸術の精華はまだ見られず、「鳥追阿松海上新話」(明11)などの毒婦物が大流行し、その後、春陵情史訳「近世米国奇談」(明14)、西河通徹訳「露国虚無党事情」(明15)、神田孝平訳「楊牙児奇談」(明19)、裁判や探偵に従事する者の参考に使われた高橋健三訳「情供証拠誤判録」(明14)など外国物の妙味が紹介されていた。が、なんといつても黒岩涙香の出現によって多くの西洋探偵小説が移入、流布したことは特筆される。

涙香の処女訳「法庭の美人」の原作は英国作家ヒュー・コヌウェイの「暗い日々」で、明治二十一年一月「今日新聞」に発表されたが、その訳出の動機は、当時の文学改良運動の波から出ていた。

戯作などの読みにくい文章を退け、簡単、明瞭、痛快を旨とした。単に新奇な読物の提供というだけではなく、当時少なからず見られた誤判や不公平な裁判に対し、司法当局へ警鐘を鳴らし正義の生き方を大衆に教えるという意味合いがあった。それは社会の木鐸を以て任じていた新聞記者・涙香の探偵物にも共通していた。

はじめ涙香は絵入自由新聞、その後、都新聞にあつて、論説を書く傍ら、ガボリオ、ボアゴベ、



黒岩涙香



「法庭の美人」 (明治22年刊)

A・K・グリーンなどの作を続けざまに訳載し、こなれた訳文が受けて次々と刊行された。そのため明治二十六年を山に探偵小説の黄金時代がつけられた。

涙香の評判に刺戟されて文壇の須藤南翠が明治二十一年六月、実話風で情趣を欠いたが、「暗殺殺人犯」という創作探偵小説を刊行した。翌年六月刊で奥村玄次郎が「立志冒険砂中の黄金」という探偵趣味のある冒険小説を書いているのも注目すべきである。

さきの「情供証拠誤判録」は「殺人犯」をはじめとして明治の創作探偵小説の種本として広く利用されていた。が、つづいて同二十二年九月、涙香も「情供証拠誤判録」の第一判例をタネに「新案の無惨」という創作を試みた。それは疑団、忖度、氷解の三部だての推理型探偵小説で、日本推理小説の嚆矢とされている。しかし、後をつづけずに終ったのは当時の庶民には本格物は不向きであることを理解していたからだった。

だが、同年にA・K・グリーン原作「真ッ暗」を「絵入自由新聞」に発表して、謎解きゲームの趣味

砂中黄金 主 監



「砂中の黄金」表紙



「無惨」表紙

を紹介するなど、探偵小説にたいする理解の確さも示していた。

涙香の翻訳は、己の持ち味を生かした自由訳で一般大衆向けの平易さがあつた。それとは別に知識階級向けに周密文の翻訳を行なつたのは森田思軒で、一時は翻訳王という名声を得たものの、その人氣を長く保つことはできなかった。

涙香の翻訳の人氣に追隨した訳者に、丸亭素人、南陽外史、菊亭笑庸、金子不知火、坪内逍遙、森鷗外、榎本破笠、英人・石井ブラックなどがあり、作者としてさきの南翠のほかに幸田露伴、中村花瘦、井上笠園などがいて創作物を書いた。

露伴は薬物に造詣があり、涙香の「無惨」発表の同年同月に「是はく」という探偵小説を「都の花」に書いた。引き続き発表した「あやしやな」は二種の薬を別々に服用すると毒ではないが、同

時に服用すれば劇薬になるというトリックを用いている。そのほかにも、短編で探偵物をいくつか書いている。

二 探偵実話時代

涙香の人氣に圧倒されて、さっぱりその刊行物の売れなくなった文壇の硯友社^{けんゆうしや}一派は、春陽堂の勧めもあって、明治二十六年一月から「探偵小説」叢書二十六集を出して反撃をみせる。創作、翻案、実話めいたものも混っていた。春陽堂は長編を「高等探偵」叢書として同年八月から三冊出したが、反響はなかった。

響はなかった。

これに対抗したのは大阪の駿々堂で、同年七月から「探偵小説」の叢書で四十九集まで発表した。

この年から翌年にかけて今古堂も「探偵文庫」十編を刊行しており、二十七年一月より裁判小説「鳳林文庫」が鳳林館から刊行されるなど、探偵小説全盛の感があった。

だが、明治二十五年都新聞を退社し萬朝報^{よろづちようほう}を興



春陽堂刊「探偵小説」表紙



寝々堂刊「探偵小説」表紙



寝々堂刊「探偵小説」表紙

した涙香が、明治二十六年から探偵小説から離れて人情奇談物に移っていたので、探偵小説の流行は次第に鎮静に向かい、探偵実話時代に移行した。

涙香が去ると、二万七千部も出ていた「都新聞」が七千台に激減し、同社をうろたえさせたが、二十六年より探偵実話を連続発表して窮地を脱した。

探偵実話はこの時突然に起ったわけではなく、例えば初期の毒婦物や二十一年の「摘陰奇獄」(千原伊之吉訳)、二十二年の「遠山桜」(二筆庵可候)、蕩微「蕩微函嶺夕霧」(彩霞園柳香)、二十四年の「蘭幽淵軌」(森沢徳夫)、二十六年の「美人罪」(二筆庵可候)や新聞雑報などに、その萌芽を見ることができ

る。探偵実話といっても、翻訳ものと違った和製の探偵小説といってもよいものだから、翻訳物の反動として起るべくして起ったものと考えられる。探偵実話が流行したのは、すでに涙香が見抜いていたように、日本人は元来ものごとに情緒的に対応する国民性があり、論理的で読みにくく非現実的な翻訳物よ